

無双直伝英信流正統第二十代宗家 河野稔天劍百鍊先生

伝承会報

第十号 令和二年七月五日発行

編集発行 鈴木伸昌

林崎甚助重信公に関する言い伝えについて

山形県尾花沢市細野に、熊野居合兩神社の奥の宮がある。そこは林崎甚助公が修行したと伝えられる地で、その奥の宮の近くに坐禅に適した岩が残っている。勿論歴史的な証明はなく、言い伝えである。しかし、トロイの木馬の例もあり、言い伝えをバカにする気は筆者にはない。

修行時代の林崎甚助公に関する言い伝えを、銀山温泉におられる居合人にして陶芸家・伊藤瓢堂先生が送って下さったのでご紹介する。

天童市のHギフトセンターにおられるNさん（尾花沢市延澤の旧家の出身）がそのお父様から聞いた話です。

このお父様という方は昭和六年生まれ。延澤城下の天領区六沢育ちです。延澤城は延澤藩の山城です。延澤藩は、最上家が改易となる元和八年まで銀山を持っていた県内有数の藩で、後に幕府直轄の天領と

なります。

村山市林崎 ↓ 大蔵 ↓ 背あぶり峠 ↓ 尾花沢畑沢 ↓ 細野入口

↓ 延澤 ↓ 六沢 ↓ 銀山

村山市林崎と修行の地細野との間にあった背あぶり峠ですが、奥の宮からは裏道として背あぶり峠にでる山道があったと伝えられています。なおこの背あぶり峠あたりは今は国道とはなっていますが、今なお険しい山道です。

林崎甚助公が、修行を終えて林崎への帰路、背あぶり峠で山賊に出くわしました。山賊に囲まれアジトに連れていかれました。アジトは洞穴で暗く、油の明かりのみ。山賊の長が、その前に林崎甚助公を座らせ、「その刀を抜いてみせろ」と迫ります。甚助公は「はは」と。薄暗い洞穴の中、瞬きするとわからない、ほんの一瞬キラリと光る。甚助公は鞘に納まったままの刀を両手で長に差し出しました。すると、山賊の長の首がポトッと落ち、手下たちは悲鳴とともに逃げ出しました。

新聞「日本武道」より

河野家に大日本武徳会が発行していた「日本武道」とう新聞がある。

その中に興味深い記事がありました。もはや他では入手不可能と思われるので、転載させていただきます。

○「土佐の居合術に就而（ついて）」日本刀莊 谷村秀喜

（日付をメモし忘れましたが、昭和十年前後です。）

無双直傳長谷川英信流の本場たる土佐國に於いては、現在土佐出身の自分等は当流を内訳して（中西流）と（穂岐山流）の二派としております。同じ土佐の英信流であって、前記二派の異なる点を一言にして言

い現さしむれば、穂岐山流は形としては美練され観る目誠に華やかなる形そのものである。

然るに中西流は即ち直で然も機敏であり、真剣味充実し理論徹底し自ら鬼気迫る実戦そのものの技である。

一例を挙げるに、穂岐山流では抜刀から刀が鞘に治まるまで総じての形が悠長にして動静が大きく華やかなるを特徴とす。

中西流については、総じての形が敏捷にして動静は穂岐山流に比してやや小さく生気漲りて敵を斃すを目的とし、然も理論的に研究され、利剣そのものである。

中西流の抜刀は刀身が今まさに鞘を拂わんとして切先三寸鞘に残りたる時切先に氣力を充実として体をヒネリて刀身を發出して敵を弾力斬にするものである。

弾力斬とは例えば一本の竹の根本と先を両手にて握り、之を円形に引き枉げて一方を放ちたる際の弾力氣分を云う。即ちこの氣分で持つて敵を斬りつけるのである。形が技であり技が形である居合術の総じての動静が徹底して居なければならぬ。

一例するに大森流の五本目八重垣の形に於いて抜付けに敵の首或るいは胴を斬りて次に面を割る。而して血振りをなし刀が鞘に治まりかけて残心を入らんとする時、倒れたる敵は半ば起き上がりて自己の右足を拂いに來たれるにより、更に刀を抜き付けて敵刀を撥き返し、直に間髪を入れず敵の面を割る。このところまでは、両派共大同小異であるが、ここにおいて理論の異なる点である。

この場合穂岐山流ではその場合は左足を屈すると同時に敵の面を割る。中西流に於いては、その場より更に左足を一步踏み出すと同時に右足を屈して面を割る。この左足一步踏み出す点が中西流として理論の徹

底したる点である。何故なれば自己の最前方に出たる右足を敵が拂わんとする時には自己と敵との間隔は敵の刀身と伸びたる敵の腕との長さの間隔があることは何人と雖も言を俟たざるところである。然らば敵と自己との間隔は少なくとも五尺位の勸角はるのが当然である。故に前述穂岐山流の如くその場に於いて左足を屈して斬り付けたる所で、剣先は敵に届き憎い理論となる。故に中西流では右足(筆者註 左足の誤植と思われる)を一步踏み出して斬り付けるのである。斯くすれば完全に自己の剣先は敵に達し、目的を果たし得べきである。斯くの如く中西流は無双直傳長谷川英信流表形四十二本、番外三本共此の理論が徹底致しております。

尚、一言して置きたいのは当流には表形の他に裏形が更に四十二本ある事を御参考までに申し添えておきます。

(筆者註)

この記事は昭和十年前後ですが、穂岐山先生は大正十年に既に大江先生から宗家を継承されております。

穂岐山先生の教えを河野先生が本にした「無双直伝英信流居合術全」(昭和八年刊)で、八重垣の脛圍いの動作の後について「左膝を跪くや」としか書いておりません。小生はこの左膝は右足踵の位置につき、右足は更に一步進めて割り付けると習いました。そうしますと、敵との位置は中西先生と同じ。違いは前に出る足が右か左かだけの違いになります。

ちなみに、「無双直伝英信流居合術 全」では、「虎一足」も「脛圍」も、「左膝を跪くや」であり、左膝をどこに着くかは記載がありません。小生は、両技とも、八重垣と同様右足踵の位置に左膝をつけ、右足は一步進めて割り付けると習っております。

なお、河野先生が「無双直伝英信流居合道」(昭和十四年刊)では、「左膝を跪きつつ刀を左側より雙手上段に振りかぶり左膝を前に進めて地に右足を前に出して」とあり、注意点として「左膝をその位置にて床につけてなすも、又は左膝を右足の後方に少し進めて跪き、更に右足を進めて後打ち下すも良し。要は敵との間合いの如何にあり。」とありますので、ここの足の踏み出し方が穂岐山流と中西流の違いとまで言えるのか、一考を要するのではと、僭越ながら思います。

なお、この記事を書かれた土佐出身の谷村秀喜なる人物は、この武道新聞に広告を出しておりました。「居合刀種々あり 大阪市 市電細工谷停留所前・日本刀荘」とありました。居合刀各種あり とあるので、刀荘とは刀商のことなのでしょう。また細工谷というのは大阪市天王寺区の地名です。

岩田憲一先生はこの記事の一部を自著「古流居合の本道」に転載しておりますが、「弾力斬りにするのであります。」以降の肝心なところは転載されていなかったことがわかりました。

○「土佐居合について」長谷川流第十八代居合術教士 竹村静夫

(昭和十一年二月一日)

土佐居合を語るものは藩政時代に於ける谷村派並びに下村派の両派を究め、而して徳川幕府中期迄遡り「一國一人の相傳也」と云う当流の根源を究むるに非ざれば未だ其の器に非ず。いやしくも土佐居合を説く者は、只々先師の教えを遵奉するに止まらず、克く両派の教えを含味して其の理論と実技とが相一致する、即ち其の呼吸、気位並びに気合、間合い、刀法等総てが今日の剣法に合致し得るものでなければならぬ。

斯道に志す人々は決して机上の空論に依って当流の手の内を兎角云々することなく、当流各本の教えに付き、それぞれ吟味して先師の教えの那邊にあるかを悟り、真の教えは単なる架空的なものではなく、実際と理論と合致したものであることを究めなくてはならない。斯道に志す人々が「居合は人を切るものではない、腹の教えである」と説かれるのを拝聴するが、誠に然りである。然しながら其れを説かれる迄には深甚の研究と努力を積むにあらざれば、未だ其の資格は認められない。其の腹即ち斯道の極意に到達するまでにはよりよく練磨し、真に心剣一致の妙諦を悟りたいものである。

国家における必勝の軍隊錬成の主眼が那邊に存するか、邦家が三十六年の危局に際し毅然として外患を圧倒するのは何故か、形の上に於いて国家と個人の差こそあれ、斯道究極の目的は「居合とは人に切られず人切らず只つつしみて平に勝て」であって、刀鞘の内にあって敵を制する迄に至らなければならない。これが為には常住坐臥不斷の精進によって、全国無比なる当流の奥旨を悟るべきである。

尚当流は他流に見るが如く単なる抜刀術にあらずして、独立した土佐独特の居合道である。即ち四十七本の居合の他に太刀討(打?)の位、法合(詰合?)の位、大小詰、大小立詰の秘伝の存することを忘れてはならない。

余は土佐居合道の復活に志すこと多年、今や邦家非常の秋に際し各方面の御示教とご協力のもとに当流の隆昌を期したいと念ふ。(終)

○「大阪の居合術熱と八重垣會の河野稔氏」

(昭和十一年四月一日)

大阪在住の居合術の達人に河野稔氏あり、居合術教士穂岐山波雄氏

死去後、藤本猪會太氏並びに同氏により週二回武徳会大阪支部道場に於いて、気まぐれ會員の出席如何を問わず風の日も雨の日も定めの練習日には寒中暑中を問わず只一人の場合でも熱心に練習を続けられ、事業御多務の中連月本紙に居合術に関する原稿(筆者註 英信流の業の解説)を頂戴致し之が為意外な方面に読者の増加を見つつあり。これを以て見ても武道門外人にも多く居合を精神修養に、心を練る武芸としての心が如何に動きつつあるかを察知できる。

大阪刀劍會の會員中には刀劍の鑑定がどうか出来ても刀の抜き方切り方を知らねばと本紙河野氏の居合欄を熱心に見て研究しておられる人もある。錦城刀劍會の齋木會長も是非居合をやりたいが練習に出かける時間の都合が悪い為め、本紙を再読してお宅で研究して居られる由、練習の場所と時間の都合さえつけば日本人である以上、劍道、柔道、弓道はやれなく共居合だけは心得て居(置?)きたい。斯くして一増(一層?)日本刀に親しみたいという人も沢山ある。

有閑ブルのゴルフ、モボのダンス其の他も絶対悪いとは言わないが日本人である以上時局柄こうした方面に心してもらいたい。

現在大阪居合術界には西淀川区に木村儀一氏の居合道場あり、船場署に藤本猪會太氏あり、南海鉄道の道場には額田長、谷巖の両氏あり、八重垣會には河野稔氏初め中村貞次郎氏あり、最近武徳殿に一寸顔を出さないが堀寅次郎氏あり、三菱倶楽部に佐々木、奥田、松丸、葛西の各位あり、その他いづれも居合術発展の為努力せられつつあるは、頼もしき限りなり。

○「秋田木材精進會 道場の居合術」

(昭和十一年四月一日)

(筆者註 秋田木材とは、河野先生の奉職先) 秋田木材株式会社の小仲弘士郎氏(劍道鍊士)は劍道修養する者が刀の抜き方も知らん様では恥だ。竹刀を持っても刀筋を考えない練習では駄目だとあって八重垣会の河野稔氏を教師として部員全部に居合術の練習を進め毎月曜日は小仲鍊士を初め十数名の熱心なる人々は猛練習を続けて居る。

同道場は劍道も中々盛んにて志賀教士を名誉師範に迎え毎月曜日に土田教士に稽古を受け盛んなり。本年五月本部の武徳祭には同道場より居合術に小仲、高瀬、田中、鎌田、森原、杉本、上野、森原、間谷、永宮、南野、斎藤、大崎、柏原、阿部、以上各位出場し花々しき處をお目にかかる由。(筆者註 この記事には写真も添えられ、そこには、十三名の稽古風景が映っている。)

河野先生の宗家継承に関するK・I先生の発言について

河野先生が無双直伝英信流の第二十代宗家であることは紛れもない事実である。

しかし、大江先生の門弟の森繁樹先生は「英信流にはもともと「宗家」はない。」などという。

呼称としての「宗家」はなかったかもしれないが、要するにその森先生自身の師匠大江先生の立場について、河野先生は便宜的に「宗家」という呼称をつけたのかもしれないし、福井春政先生からその呼称で、次代継承を依頼されたのかもしれない。

要は、継がせた方の福井先生ではなく、全て河野先生を悪者扱いするような表現を時々聞くのである。

K・I先生が一九八八年八月二十一日に行った講習会でこう述べて

居られる。「二十代の河野先生は、著書で十九代から継げといわれて継いだと書いてありますが、あれは嘘で、ねだったそうです。ねだってねだってねだり倒して、とうとう取り上げたそうです。」

ねだられたって、結局それを認めたのは福井先生なのだが、この表現は、河野先生を悪者にする作為に満ち満ちているように思える。

前号で書いたように、戦後稽古すらままならないときに、福井先生が居合稽古再会を誘ったら、「今それどころではない。先ず食うことが先だと言って取り合ってくれなかった。」のは、土佐の居合人だったのではないだろうか。

K・I先生を攻めるつもりは小生にはありません。門弟相手のお話では、表現が多少誇張されたりすることもあると思います。まさかその講習会の映像が、コピーされ、色んな所に出回ることなど、今ならともかく一九八八年当時は思いも及ばなかったことと拝察します。

要は受け取る側であると思います。

筆者はかつて郷土史に首を突っ込んだことがあります。伊達藩に江戸時代に存在した布袋軒という虚無僧寺について数年かけて調べ、その時についた郷土史の先生から教わったのは、資料検証の大事さということでした。その資料が一次資料かどうか、一次資料からの引用である二次資料(子引きという)、その二次資料からの引用である三次資料(孫引きという)、そのまた引用等々の場合、引用の際には引用した者の思惑が混じるので、必ず原本に当たれというのが要旨でした。

K・I先生からのこういう発言についても同様だと思っています。冷静に、客観的にとらえるべきだと思います。K・I先生は、「ねだられた」ということを福井先生から伺ったのでしょうか。そうでないなら誰からお聞きになったのでしょうか。

冷静に考える。

河野先生が二十代を継いだのは昭和二十五年五月十四日。それに先んずる昭和二十四年十二月十八日に河野先生は福井先生より印可状を与えられております。当然二十代継承の打診は遅くとも前年二十四年にはあったはずです。

昭和二十四年とは、どんな時代だったのでしょうか。

昭和二十四年七月三日の朝日新聞には「輸入食料と貯蔵米の放出が特別に許可され、この異例の放出により、非常事態が予測される八月九月の配給が確保される」という記事があります。まだまだ食料すら、満足にいきわたっていない時代ということがわかります。

しかも、忘れてはならないのは、この時点で、日本はまだアメリカの占領下にあったということです。日本は不景気の真っ只中です。

日本が不景気を脱した、いわゆる朝鮮戦争の特需は、昭和二十五年六月に、米軍の在日兵站司令部が設けられてから始まるのです。

河野先生自身も、野菜を自ら栽培されるなどしていたそうです。K・I先生自身も、戦争から帰ってきて、居合どころではなかったと言っています。

英信流という居合の流派は、今でこそ全国津々浦々で物凄い人数が修行していますが、当時はどれだけ人口に膾炙していたのでしょうか。

年齢はどうでしょうか。前号でも書きましたが、戦後居合の再会を福井先生が声がけた時、福井先生は六十五歳、声を懸けられて断った山本晴介先生五十五歳、山本宅治先生六十三歳です。河野先生は五十一歳です。

当時の会社員の定年は何歳でしょうか、昭和六十一年に国は企業に六十歳定年を努力義務に課しました。つまり当時の定年は五十五歳。

それよりも三十五年以上も前の昭和二十四年の資料は見つけられませんでした。(ちなみに、NHK『ファミリーヒストリー』に出演した春風亭昇太師匠は、「祖父は昭和二十年に五十五歳で定年となり」と発言していました。)

いずれにしても、河野先生ご自身も、もはや定年が近い年齢であることは確かであります。いくら居合に専心していても、その前に日々の暮らしを確立しなければならぬことは自明の理であります。

そして、寿命の問題もあります。厚生労働省発表、平均余命の年次推移によれば、昭和二十四年に生まれたゼロ歳児の平均余命は男で五十六歳なのであります。

健康面についてはどうでしょうか。当時は健康保険は国民にいきわたっていない時代です。国民皆保険が達成されるのは、昭和三十六年です。その健康保険でも当時の自己負担は五割です。

まだまだ結核は死の病であり、抗生物質は気軽に使える状態ではなかった時代であります。

河野先生は、決して若いとは言えないときに継承しています。そのことを先生は深く自覚していた証拠に、宗家を継承した翌日、昭和二十五年四月十五日に、早くも「無双直伝英信流居合兵法 後継宗家候補者決定之掟」を定めているのであります。

河野先生は、その後毎年正月元旦に、宗家継承の遺言を認める習慣だったそうですが、最後の伴侶となる文子様を得て以降は、無かったとのことでした。

なお、河野先生は亡くなられる年の五月十一日に故郷大分県日田市天ヶ瀬において喜寿の小宴を開く予定でした。

河野先生は、その小宴で次代宗家を発表し、ゆくゆくは故郷に戻る

おつもりだったそうです、その地に道場を立てられるような土地も探していたと奥様から伺いました。その案内状を出した数日後に倒れました。

歴史にもしほありませんが、もし河野先生が少なくともその小宴の日までお元気であったなら、とふと考えてしまいます。

話がそれました。

河野先生が継がれたことについて、やいのやいのいう人が居られますが、冷静に当時の状況をばつと思いつくだけの要素で調べても、とてもとても、気軽に継げる状況でないことは、普通の感覚を持った人ならご理解いただけるのではないのでしょうか。

明治期に廃れかかった剣道は、西南戦争で息を吹き返したと言われます。昭和二十五年、剣道もGHQから禁止され、歌舞伎も禁止され、映画の時代劇も禁止され、連合軍の占領自体いつ終わるかかわからない時代(占領が終了するのは昭和二十八年四月二十八日)に、宗家を継承しても、明治期の西南戦争のように居合が復活する契機がくると誰も云えない時代ではないでしょうか。もし武道がすたれ、入門者が枯渇し次の世代が生まれなかったら、大阪の河野の責任とされるのです。

K・I先生は「河野先生がクレクレといった」といつてますが、それは経済大国となり、趣味で休みの日に稽古にいそしめる状況で、初めていえる表現ではないでしょうか。

居合の道に於いて、河野先生よりかなり後輩でありながら、この言葉は、ちよつとご無礼ではないかと、正直感じます。自分の講習会から言葉が過ぎたのかもしれませんが。

要は受け取る側です。話は一方から聞いたことは鵜呑みにせず検証すべきであるということを自戒を込めて、書かせていただきました。